



## 『黒田家・官兵衛ゆかりの地(姫路市西部)』をたずねて

<はじめに>

姫路市西部に残る“黒田家・官兵衛ゆかりの地”は、永禄12年(1569)官兵衛が初めて大きな戦いに挑んだ青山の合戦から天正8年(1580)羽柴秀吉が播磨を平定するまでのところが中心である。当時、播磨は毛利氏と織田氏の勢力争いの間にあって、その殆どが秀吉の攻撃を受け被害に遭っている。この間、別所氏に続いて荒木氏までも信長に叛旗を翻し、秀吉は苦しい戦いを強いられた。官兵衛は天正6年(1578)秋から翌年秋にかけて荒木説得に行った有岡城に幽閉され、黒田家とともども非常事態に陥った。しかし、毛利氏に対する信長の戦いが優勢になるにつれ、別所氏、小寺氏、三木氏、宇野氏の居城が相次いで落城または開城し、播磨の戦国時代は終焉を迎えることになる。官兵衛は地下牢から復帰すると、弱った体を鞭打ち戦いに参画していった。今回、官兵衛より秀吉に関わる記述が多いが、この中に官兵衛がいたことを想像しながら読んでいただきたい。

## ①松山城跡(林田町松山)

英賀城落城(天正8年4月26日)の2日前、秀吉は軍を分け宍粟郡の宇野氏に兵を発した。『長水軍記』に「先勢一千騎荒木平太夫大将ニテ林田通ヨリ向フ、次ノ一軍三千騎小寺官兵衛孝高大将ニテ崎崎ヨリ向フ、次ノ一千騎神子田半左衛門大将ニテ同林田通りヨリ向フ、後陣二八秀吉自ラ木村、竹中、石見、樋口其他大勢ニテ林田通ヨリ向ヒ給フ」とある。秀吉軍が大挙して林田を通った時、松山城が落とされたことがわかる。この時、松山城は本郷宗祐(長水城主宇野政頼の四男)が守っており、秀吉と最後まで戦った宇野氏と運命を共にしている。



①不動橋より松山城跡を眺む

## ②狭戸(安富町)

狭戸は林田町松山から安富町に入ったところである。『長水軍記』に、長水城主の宇野祐清が「狭戸ノ山蔭ヨリ左三巴ノ旗三流真先二押立テテ(秀吉の陣に)時ヲ作ツテカケ入ル」「秀吉ノ勢周章騒ギテ揉ミ合ケル間祐清ノ兵悉ク乱レ入ッテ未ダ目覚メズシテ起キアガルヲ起シモズ切殺シケレバ秀吉ノ兵夥シク討ルル」とある。これは天正8年(1580)4月にあった秀吉の長水城攻めの様子を記したもので、狭戸がそのルートになっていた。松山から狭戸にかけて、両軍が兵を三段に分けて激しい戦いを繰り広げたという。おそらくこの戦いで亡くなった兵士を弔ったであろう五輪塔が狭戸周辺集落に数多く残っており、地元ではこれを「ごりんさん」と呼んで、今も大切に祀っている。



②狭戸の五輪塔

## ③林田大庄屋旧三木家住宅(林田町中構)

「林田藩大庄屋三木家文書」によると、秀吉によって攻め滅ぼされた英賀城主三木氏一族の者はそれぞれ遠方へ逃れた。通秋の弟定通は宍粟郡門前村(現在の宍粟市山崎町門前)に逃れ、その後すぐに林田村に住み付いた。もう一人の弟通基は掛保郡香山村(たつの市新宮町)に逃れていたが、弟定通の縁によって林田に移り住んだという。先に来た弟定通が構三木家となり、兄の通基は六九谷三木家となった。定通は窪山城跡(「聖岡」)に居を構えたが、元和3年(1617)建部政長の林田移封に際して聖岡を差し出し、屋敷は麓に移された。この時、定通は藩主より大庄屋に任命されたという。3代目定久の時、三木家は麓から現在の場所に移され、明治を迎えるまで大庄屋を務めた。[兵庫県指定重要有形文化財]



③林田大庄屋旧三木家住宅

## ④峰相山鶏足寺跡(伊勢・峰相)、⑤破磐神社(太市)

鶏足寺は峰相山(標高239.7m)の南腹に位置する山岳寺院で、新羅の王子の創建、金堂・講堂・法華堂・五大尊堂・鐘楼・五重塔・三重塔・宝蔵・僧坊など300余の建物があったとされる(『峰相記』)。天正6年(1578)峰相山鶏足寺の宗徒が秀吉に叛いて蜂起したため、秀吉は黒田官兵衛に命じ、これを伐たせた。官兵衛は太市郷民を誘い、8月10日同寺に攻め寄せ、坊舎を破却した(『姫路城史』)。現地は「石倉峰相の里」、「太陽公園」、上伊勢から登れ、現在、礎石・五輪塔・石垣跡が残されている。『太市村誌』にも「(鶏足寺は)羽柴家二叛ス、天正六年八月十日太市郷民二仰セ、小寺氏ノ下知トシテ破却ス。傘二火ヲカケ坊舎ヲ焼ス」と記載され、峰相山鶏足寺が秀吉の中国攻めに抵抗、太市の郷民が坊舎に火をかけ消滅したことを伝えている。太市の破磐神社では、毎年8月15日に厄年の氏子らが本殿前の舞殿で松明を床にたたきつけ合う祭り「奉点燈祭」が行われているが、峰相山鶏足寺の衆徒らを供養するために始まったと言われている。



④峰相山鶏足寺跡

## ⑥十地坊跡(書写)

『信長公記』に、天正6年(1578)羽柴秀吉が加古川の賀須屋(糟屋)内膳の城から書写山に居陣し播磨攻略の拠点にしていたと記述されているが、『播磨鑑』等には「白山の十地坊に入った」と具体的に出てくる。同年、東播三木城の別所氏が蜂起すると、美作国境付近で軍事行動中であった秀吉は書写山に戻った。この時、円教寺は3000石の兵糧米を提供するなど寺の保護に努めていたにもかかわらず、秀吉の軍勢は3月6日、山内の坊舎仏閣を破壊し「老若上下方々馳散」する状況に陥ったという(「播州書写山円教寺古今略記」)。十地坊は大講堂の横手から白山権現に向かう途上であり、標高360m級の書写山で最も高い峰に位置している。その下には摩尼殿や大講堂などの円教寺の主要伽藍が広がっていることから、戦乱に備えて書写山円教寺も立て籠もることのできる城郭を築いていたのかもしれない。



⑥十地坊跡



かわらけやま

### ⑦土器山（下手野）

永禄12年（1569）8月9日、龍野城主赤松政秀が3000の兵を率い姫路西方の青山まで攻め寄せた。この時、官兵衛は姫路城で政秀軍を迎えるのは不利と考え「播州土器山にて対陣した」（『黒田家譜』）。土器山は現在の秩父山に比定され「今宿手野の間、国道の北なる小連峰をいふ、標高五十五米也」（『飾磨郡誌』）。『播州統古処拾考』には「下手野村北山を瓦山といふ八青山堂をたてし時、瓦をやきしと云」とあり、地元では、かつて山名宗全が青山に寺を建てた時、ここで瓦を焼いたので「瓦山」と伝わる。『姫路城史』には「かわらやま」「かわらけやま」音が近い。おそらくこれを誤って「土器山」と記したのではないかと書かれている。「土器山」の陣跡は下手野の船越神社から階段を上り、金比羅社の横道を上ったところにある。山上から見ると、龍野勢の攻め口（桜峠）と姫路城とがほぼ一直線上にあることが実感できる。



⑦土器山

### ⑧青山古戦場（青山）

永禄12年（1569）8月9日、龍野勢は夜陰に乗じて土器山を襲撃、この戦いで官兵衛は母里氏をはじめ多くの家臣を失った。明日はもっと多くの犠牲者を出すと踏んだ官兵衛は相手の油断を突く作戦に打って出た。黒田軍は小丸山（現在の青山西4丁目北側の住宅団地と青山ゴルフ場付近）に着陣していた赤松政秀軍の背後をつき、また英賀の三木通秋軍の加勢もあって龍野勢を混乱に陥れ大いにこれを破ったという。この戦いの跡が「千石池」と「小丸山」で、今も政秀軍が逃げたという抜け道が残り、「千石池」は人の首が落ちていたとかで「戦国池」と呼び名が転じたという言い伝えがある。この「青山古戦」は三木の別所軍と龍野の赤松政秀軍が呼応して小寺政職の御着城を攻めようとした戦いである。



⑧青山古戦場



⑨置塩城跡

### ⑨置塩城跡 (置塩)

黒田二十四騎の一人吉田六郎太夫 (姫路市八代村の出と言われる) の家の記録を編纂した『吉田家伝録』の「吉田長利武功之章」に「小塩山の麓にて合戦あり…この時、別所・赤松兵を合わせて小寺と陣を対す。別所が兵2、300進み来る。孝高君これに向ひ給ふ…この戦ひ元亀元、二年の間にして…」とあり、永禄10年(1567)頃から元亀年中(1570年～73年)にかけて三度戦ったと記述されている。当時、播磨の諸勢力は小競り合いを繰り返しており、三木の別所勢と龍野の赤松勢が小塩(置塩)の赤松宗家を攻め、御着の小寺氏が小塩(置塩)方として再三救援に向かったとされる。この時、小塩(置塩)城は落ちなかったが、秀吉の播磨平定後、信長の命で破城された。姫路城の搦め手にある「との一門」はこの時に小塩(置塩)城から移築されたものではないかという説もある。[国指定史跡]



⑩英賀神社に残る土塁跡

### ⑩英賀神社に残る土塁跡 (飾磨区英賀宮町2丁目)

英賀は夢前川の河口近く、東西に連なる砂州の帯上にあり、北は後背湿地、西に夢前川、東に水尾川に囲まれ、その周囲に土塁が築かれていた。もともと村全体を水害から守るために築かれたであろうが、英賀にはかつて港をもつ市場が形成され、そこへ本徳寺(英賀御堂)などの真宗寺院が建てられてから「寺内町」としての性格をもつところとなった。土塁はその「寺内町」を守るように連なり、10の出入り口が設けられていた。従来、英賀城を紹介する文献の多くは英賀全体を取り囲む土塁の内側を英賀城としてきたが、『播磨鑑』には「英賀城」と「英賀村古城跡」と区別した表記がなされている。証如上人の『天文日記』にも「英賀三ヶ村」と記されており、英賀は明蓮寺を中心とする集落、英賀神社を中心とする集落、中浜町周辺の集落から成り立っていたことが分かる。現在、土塁が残っているのは英賀薬師(英賀東町1丁目)の北側とここ英賀神社本殿裏のみである。本殿横に司馬遼太郎の『播磨灘物語』文学碑が建てられている。

### ⑪英賀城本丸跡碑 (飾磨区中浜町2丁目)

中浜町2丁目の辺りを字「城内」といい、かつて「英賀城」と言われる城郭施設が建っていた。『英城日記』によると、英賀城主は讃岐三木郡を領した伊予河野氏の一族で、応永(1394～1427)の頃、細川氏のために讃岐を追われ、赤松氏を頼って播磨に来た。はじめ松原郷恋浜に居住したが、嘉吉の乱(1441)後、英賀に移って、天正8年(1580)羽柴秀吉の攻撃を受けて滅ぶまで、9代140年間、その地位を世襲したとある。『天文日記』によると「英賀村三カ村」は六人の「長衆」や十一人の「中老衆」による自治が行われ、その長衆の一人が本徳寺(英賀御堂)を開創した中心人物で、英賀城落城時の三木通秋の先祖ではないかとされる。「英賀城本丸」が建っていた字「城内」は周囲の低湿地だった所より1mほど高くなっており、1丁目と2丁目の境界となっている水路が堀跡と考えられている。



⑪英賀城本丸跡碑

### ⑫明蓮寺境内「英賀本徳寺趾」碑 (飾磨区英賀西町2丁目)、

### ⑬亀山本徳寺 (亀山)

15世紀後期、本願寺祐全が英賀で道場を建て、永正12年(1515)本願寺蓮如上人の弟子空善によって本徳寺(英賀御堂)が建立された。蓮如上人の孫実玄が初代住持につき、英賀は播磨における一向宗の拠点となった。やがて信長と大坂本願寺が戦火を交えるようになると、英賀から本願寺へ兵糧が運び込まれ、英賀は本願寺と結んだ毛利水軍の中継基地となった。信長配下の秀吉にとって英賀は重大な攻撃目標となり、天正8年(1580)4月26日に落城。その2年後、本徳寺は秀吉より300石の寺領の寄進を受け亀山に堂宇を遷された。これが現在の亀山本徳寺である。かつて英賀本徳寺のあった所に、昭和3年(1928)碑が建てられたが、昭和16年(1941)日本製鐵広畑製鉄所建設に伴う夢前川の河川付け替えて河川敷となったため、碑は明蓮寺境内に移された。



⑫「英賀本徳寺趾」碑



⑬亀山本徳寺

### ⑭山崎構居跡 (英賀保)

『播磨鑑』によると、英賀三木家の一族山崎惣右衛門の守るところであったが、天正8年(1580)羽柴秀吉は英賀攻略にあたって、弟秀長を遣り山崎山に陣を敷かせた。この時、惣右衛門は武勇を尽くすも大勢に囲まれ討死にしたとされる。この時、圧倒的な軍勢で短期間に攻め立てたであろう、ここには城跡らしきものが残っておらず、「長さ十四間横六間、陣小屋を掛」とある(『播州古城跡集』)。現在、山崎山の麓にある亀山本徳寺廟所から登ることができ、山頂は水源地になっている。東南部斜面の削平地に城跡の碑が建っている。



⑭山崎構居跡



⑭山崎構居跡(城之台碑)

### ⑮町坪構居跡 (荒川)

英賀城三木氏の支城で、東西28間、南北26間の平城であった(『播磨鑑』)。領主は町ノ坪弾四郎主水佐で、英賀の幕下であったが戦闘で武功を上げるも討死にし、その後、黒田兵庫頭(利高力)が守ったという。『飾磨郡誌』に「町坪合戦」として、天正8年(1580)黒田官兵衛が攻落し、井口猪之助と三宅藤十郎に預けたが、夜襲を受け、井口が勇戦したが、敵前にて腹を切った話が載っている。当時、町坪構居は「用害(要害)」と認識されており、「土居ノ内」という字名が残っている。本丸跡を中心に堀跡と見られる水路が残ると共に、構居の北東約150m離れた所の「茶園堀」は堀跡と言われ、南西隅に五輪塔群が残っている。地元では天正8年(1580)の合戦で討ち死にした町坪弾四郎一統の埋骨・立塔の跡と言われ、今も8月31日に供養が行われている。



⑮町坪構居跡五輪塔

#### ⑯ 仏日山法輪寺（「茶くれん寺」）（荒川）

臨済宗妙心寺派、本尊は行基作と伝えられる薬師如来。開創は平安時代と推定され、鎌倉時代には海石山晦蓮寺と称する天台寺院であったといわれる。『播磨鑑』には、宝林寺と書き赤松則祐の建立で寺領50石、赤穂郡の宝林寺より雪溪和尚が移り住み禅寺になったとある。嘉吉の乱（1441）後、英賀の三木氏の崇敬を受け、寺領を安堵される。天正8年（1580）、羽柴秀吉が英賀城攻めの途次、平服で当寺に立ち寄り茶を所望したが、秀吉とわからず白湯を出したので、秀吉から“湯沢山茶くれん寺”の寺号が与えられた伝承が残る。江戸時代に入り、妙心寺派、仏日山法輪寺と改称したという。朱印地9石・山林竹木諸役免除、9通の朱印状が残っている。また、平成25年度には、秀吉の腰掛石が樅の木の下に再現された。



⑯ 仏日山法輪寺



⑰ 龍野町

#### ⑰ 龍野町（船場）

天正8年（1580）4月、羽柴秀吉は官兵衛の勧めにより中国攻めの本拠とすべく姫路城に入城。新たに縄張りを行い築城に取り掛かる一方、4月26日に英賀城を攻め落とした。その後、「町人百姓を八助置、姫路山下へ召寄市場を立てさせ申し候事」（秀吉書状『姫路城史』）とあるように、英賀の人々を呼び寄せ町をつくった。同年10月28日には龍野町に制札が立ち、諸公事役を免除するなど手厚い保護がなされた。西国街道筋に新市街地が出現した結果、寛延3年（1750）「龍野町3丁目明細帳」には37軒の町家、2軒の市場問屋があったことが記されている。

#### ⑱ 網干

天正4年（1576）から天正8年（1580）にかけて、信長、秀吉の出した禁制や書状が網干の大覚寺に残っている。初めは兵の乱妨狼藉、山林竹木の伐採、放火、不法越権の行為等を禁じたものであったが、後には、英賀城攻略のため縄百束竹百荷等の徴収を、そして、英賀城落城の際は英賀を逃げ出した三木通秋一族の預け物を差し出すよう命じたものになっている。播磨を平定するにあたり、信長、秀吉は網干の村民が安堵して生業に従事できるようにしたが、やがて英賀城が本願寺・毛利と結び付くようになると、一転して自軍への協力を命じてきた。しかし、「魚吹八幡由緒書」に「英賀城主三木通規と縁者なり。英賀城に与力す」とあるように、網干は英賀との結び付きを強め、恰も一村のようになったという。

#### ⑲ 鶴松亭跡（網干区興浜）

播磨平定を終えた秀吉は、天正9年（1581）三層の天守をもつ姫路城が完成すると、戦功と築城に功のあった官兵衛に揖東郡越部庄1254石8斗、伊勢村上下920石、岩見庄2913石、福井庄内4907石、合1万石（天正9年3月18日「羽柴秀吉知行目録」）を与えた。官兵衛はその秀吉を網干に招き、沖之浜州で茶会を催した時の逸話が残っている。当時、揖保川の川岸から沖之白州にかけて千本松と言われる松が生い茂っていた。その松の上を多くの鶴が飛び交っていた。すると、一羽の見事な鶴が秀吉の席のすぐ側の大松に巣をかけていた。これを見た秀吉は大層満足し、そこの陣屋を「鶴松亭」と名付けたという。秀吉はその折に領内を見て回り、揖保川の治水のために岩見（室津）の里に大井堰を築き、山崎の出石（いだいし）まで高瀬舟が就航できるようにしたとも言われている。現在、「鶴松亭」跡に、京極家丸亀藩の飛地領治所として「網干陣屋」を置いたとする碑が残る。



⑲ 鶴松亭跡（網干陣屋跡）

#### ⑳ 徳栄寺（余部区下余部）

大分県中津市にある西蓮寺の「縁起」に、「播州飾東郡二光心ト云フ者有リ一字ヲ宮建ス…黒田孝高公封ヲ移シ播州ヨリ豊前国中津ニ至ル…光心一字ヲ創ム西蓮寺ト号ス」とある。光心の俗名を黒田市右衛門といい、黒田官兵衛孝高の末の異母弟と記されている。父の職隆が亡くなった時、仏門に入り浄土真宗を信奉して播磨餘部に徳栄寺を開いたと伝える。天正16年（1588）官兵衛が豊前国中津に入封した時、光心は同行し西蓮寺を建立した。その後、小倉にも西蓮寺を開いた。慶長5年（1600）長政が筑前国を拝領した時も、光心は同行し福岡博多の地に徳栄寺を建立、「播磨道場」と呼ばれた。



⑳ 徳栄寺